



日本地球化学会ニュース

No. 248 March 2022

Contents

年会のお知らせ	2
● 2022年度日本地球化学会 第69回年会のお知らせ (1)	
学会からのお知らせ	2
● 2021年度「学会賞・奨励賞」受賞者紹介	
● 2021年度日本地球化学会夜間集会・定時総会報告	

年会のお知らせ

2022年度日本地球化学会 第69回年会のお知らせ (1)

主催：一般社団法人日本地球化学会

現地開催期間：2022年9月7日(水)～9日(金)

現地開催会場：高知大学・朝倉キャンパス(共通教育棟) 高知市曙町 2-5-1

http://www.kochi-u.ac.jp/outline/campus_map.html

交通：JR高知駅より、①JR土讃線下り15分「朝倉駅」下車徒歩3分、②路面電車(とさでん交通)で約30分「朝倉(高知大学前)」下車すぐ、または③路線バス約25分「朝倉高知大学前」下車

※アクセス方法の詳細については、下記のサイトをご参照ください。

<http://www.kochi-u.ac.jp/outline/access/asakura/>

https://www.kochi-u.ac.jp/outline/acc_asakura_jr.html

内容：現地／オンラインによるハイブリッド開催。口頭発表はハイブリッド開催、それ以外のポスター発表・総会・学会各賞記念講演・夜間集会はオンライン開催を想定。ただし、新型コロナウイルス感染症拡大の状況次第では、すべてオンライン開催になる可能性があります。

セッション編成や各種申し込みの詳細については、次号のニュースあるいは学会のホームページにてお知らせします。

年会事務局：〒783-8502 高知県南国市物部乙200 高知コアセンター内 海洋研究開発機構高知コア研究所

2022年度日本地球化学会年会実行委員会

委員長 石川剛志

電話：088-878-2196 電子メール：t-ishik [※] jamstec.go.jp ([※] を半角@とする)。年会に関する情報は学会ホームページ、学会メーリングリスト等にて案内しますので、2022年度年会専用アドレスが決まりましたら、お問い合わせはそちらにお願いします。

(国立研究開発法人海洋研究開発機構
高知コア研究所 石川剛志)

学会からのお知らせ

●2021年度「学会賞・奨励賞」受賞者紹介

学会賞：木多紀子会員(ウイスコンシン大学マディソン校 Distinguished Scientist)

受賞題目：「局所高精度同位体比分析法の開発と初期太陽系の物質進化過程の研究」



木多紀子会員(以下木多さん)

は、1985年に東京大学理学部地球物理学科を卒業後、同大学院地球物理学専攻に進学され、1991年に博士の学位を取得されました。その後、神戸大学地球科学科で日本学術振興会特別研究員、アメリカ地質調査所(USGS)で博士研究員を経て、1994年に地質調査所(現産業技術総合研究所)に就職されました。1997年には、「エンスタタイトコンドライトおよびユレイライトに関する年代学的研究」という題目で日本地球化学会奨励賞を受賞されています。詳細は受賞記念論文(地球化学33, 103-114 (1999))をご覧ください。2004年からは、ウイスコンシン大学マディソン校地球科学科に Associate Scientist として着任され、Senior Scientist を経て、昨年には Distinguished Scientist に昇進されました。2010年には Meteoritical Society の Fellow、そして 2022 年の Geochemical Society の Fellow に選出されました(この原稿の締め切り日に聞きました。おめでとうございます)。

木多さんは、始原隕石中のコンドリユールや難揮発性包有物(CAIs)の高精度酸素同位体比分析と Al-Mg 同位体年代測定を用いた初期太陽系物質進化に関する宇宙化学的研究において顕著な業績を挙げてきました。また、二次イオン質量分析計(SIMS)による同位体比分析の高精度化と高空間分解能化のための技術開発で大きな功績を挙げました。具体的には、様々な始原的コンドライト中のコンドリユールについて系統的な Al-Mg 同位体年代測定を行い、コンドリユールの形成は CAIs 形成から約 200 万年から 400 万年後に原始惑星系円盤の広範囲でほぼ同時多発的に起こったことを明らかにしました(最新の研究では、普通コンドライトのコンドリユールのほうが炭素質コンドライトのコンドリユールよりも古い傾向にあるようです)。また、様々な始原的コンドライト中のコンドリユールの系統的な酸素同位体比分析を行い、隕石グ

ループ間での酸素同位体比分布の違いを見出しました。このことから、原始惑星系円盤内での動径方向で酸素同位体比は不均質であり、コンドリュール形成時に高い $\Delta^{17}\text{O}$ 値を持つ水 (H_2O) の水が寄与したこと、そしてコンドリュールの酸化還元度の違いは前駆物質／ガスの量比の大小を反映することを明らかにしました。続いて、彗星探査機 Stardust によって持ち帰られた Wild2 彗星塵に含まれる高温鉱物の酸素同位体比が炭素質コンドライト中のコンドリュールの酸素同位体比の分布と類似することを示し、内惑星領域で形成した高温鉱物が太陽系外縁部まで輸送されたことを明らかにしました。さらに、CAIs の高精度 Al-Mg 同位体年代測定により、火成組織を示す CAIs は細粒の CAIs よりも 20 万年ほど若く、一部の CAIs は凝縮直後に再加熱を経験したことを発見しました。その他、木多さんは、酸素同位体比分析の高精度化・高確度化のための試料作製手法、UV 光源による CCD カメライメージの高空間分解能化、微小試料の同位体比分析技術開発においても多くの貢献を果たしました。木多さんのこれらの業績は 147 編の英文原著論文および 8 編の英文の著書および総説として発表されています。これらの研究活動の傍ら、*Geochimica et Cosmochimica Acta* 誌、*Geochemical Journal* 誌等の Associate editor を長年務めるなど、国内外の学術活動にも多大な貢献をされてきました。また、国内外の若手研究者育成にも貢献し、20 名のポスドク、2 名の学生を指導しました。

最後に、私からみた木多さんについて紹介させていただきます（観察事実に基づく私見です）。一緒に仕事を始める前の印象は一言で怖い人でした。LPSC や隕石学会などでは、演者が話終わるや否や、真っ先に手を挙げる、小走りでマイクに向かう、納得いかないことがあると問いたださずにはおれない人です。おっかないので、自然と物理的に距離を取ってしまいます。にもかかわらず、2009 年からの 5 年間、ポスドクとして木多さんのもとで修行することになります。ウィスコンシン大学マディソン校地球科学科 SIMS ラボ (WiscSIMS ラボ) は、木多さんが時間をかけて丁寧に作り上げた最高の研究環境です（私一人の力じゃないとご本人は言うでしょうけど）。多種多様かつ厳選された標準試料がそろえられ、マシンコンディションも常に最高の状態に置かれています。世界最高精度の分析データを求めて世界中から研究者が訪れるのもうなずけます。WiscSIMS ラボで仕事を始めて早々

に、木多さんと Associate Scientist の牛久保さん（現 JAMSTEC 高知コア研究所）から「1 ヶ月で SIMS のチューニングを覚えろ」と言われ、ヤバいところに来たと戦慄したことを昨日のこのように憶えています。SIMS を触ったことのある方であればおわかりいただけると思いますが、SIMS のチューニングをして unknown を測り始めるまでが大変です。そして、どうしてもチューニングがうまくいかないことがあります。木多さんに泣きつくことになるのですが、ホイールとマウスを迷いなく動かして、「ほ～ら。できたじゃない。修行が足りないね」とドヤ顔で居室に去っていき、何が起きたのかわからないまま残りの作業を続けることとなります。ラボメンバーはこれを魔法の手と呼びます。いざ unknown を測り始めると、予想外のデータが出る場合があります。慌てて木多さんに報告に行くと、「そのデータ本当に大丈夫？」とか「どう解釈する？」ではなく、「私に最初に教えてくれてありがとう」という言葉が笑顔とともに返ってきます。これはこれで予想外です。木多さんはおしゃべりが好きなようで、一言二言で終わる仕事の話が、脱線して 1 時間以上話し込むこともしばしばです。サイエンスの話から僕の他愛もなければオチもない話にも付き合ってくれます。ご自宅に何度もお招きいただき、録画した紅白歌合戦を見ながら翌日のラボ+ご友人の新年会の準備をご家族と一緒にしたこともあります。ご自身が書いている論文で困っていることがあると相談されることもあったのですが、あんまり困っているふうにはみえない（僕はただ聞いているだけ）。むしろ、楽しそうなんです。そんなこんなでいつぞやの LPSC では、一緒に発表を聞きながら小声で「うちのほうがもっとよいデータ出せるよね?」「出せますね。やります?」「よし! やろう!」と新しい遊びを見つけられた子供のように楽しそうにしていたことを憶えています。それと同時に、自分にも他人にも厳しい姿勢の根底にあるのは子供のように純粹にサイエンスと向き合う気持ちなんだろうなと勝手に納得したことも記憶しています。木多さんにご指導いただいた 5 年間はサイエンスだけに没頭できた楽しい時間でした。私だけでなく、木多さんにご指導を頂いた多くの後進が世界中の研究機関に飛び出して行っています。学生、若手研究者のみなさん、WiscSIMS ラボで木多さんとともに Isotope geo/cosmochemistry に没頭してみたいかがでしょうか？

（東北大学大学院理学研究科 中嶋大輔）

学会賞：宗林由樹会員（京都大学化学研究所教授）

受賞題目：「水圏微量元素の化学量論比と安定同位体比に基づく地球化学的研究」



宗林由樹会員は1984年に京都大学理学部を卒業された後、京都大学大学院理学研究科に進学され、1987年から京都大学化学研究所に就職されています。その後、金沢大学工学部の助教授を経て、2000年から京都大学化学研究所に教授として着任され現在に至ります。宗林会員はこれまで海洋や湖沼における微量元素元素の挙動を中心に研究を進めてこられました。特に多くの微量元素元素について精確で実用性の高い分析法を開発し、その水圏における挙動を解明するという点で一貫した研究方針を貫いています。開発された分析法は、多元素同時分析、化学種別分析、安定同位体比分析と多岐に渡っています。京都大学理学部海洋化学・分析化学研究室の伝統を引き継ぎつつも、常に新しい分野の開発に挑んでこられた成果が今回の受賞に結びついたと思います。

宗林会員はこれまで独自に開発した分析法を使って、水圏における微量元素元素の化学量論比や同位体比などの新しいパラメーターを導入し、海や湖の地球化学の研究に顕著な成果を取ってきました。ここでは、主な成果をご紹介します。

(1) 微量元素元素の新規分析法の開発

親水性メタクリレートの母材にポリアミノポリカルボン酸型の官能基を修飾したキレート樹脂を用い、海水中のアルミニウム、マンガン、鉄、コバルト、ニッケル、銅、亜鉛、カドミウム、鉛を分離濃縮し、精確に分析する方法を開発されました。この方法は国際GEOTRACES計画に参加する数多くの研究者に利用されており、実用性の高い分析法となっています。また、海水中のモリブデン、タングステン、銅、ニッケル、亜鉛の安定同位体比分析法を開発され、実試料の分析に適用されています。

(2) 海洋における地球化学的研究

海水中の微量元素の高精度な海盆規模の鉛直断面分布を明らかにし、海洋地球化学の発展に顕著な貢献をされています。海水中の溶存態モリブデンとタングステンの分析には1980年代から取り組み、海洋全体で濃度が一定であることを世界に先駆けて示されまし

た。さらに両元素の同位体比も海洋全体で均一であることを明らかにされました。これらの結果から、海底堆積物中のモリブデンとタングステンは古海洋研究の有力な指標になると期待されています。一方、北太平洋において除去型の分布を示すアルミニウム、マンガン、コバルト、鉛はそれぞれ水塊・海洋循環と固有の関係を持つことを明らかにしました。また、北太平洋の海水中の粒子態鉄は溶存態の約4倍量に達し、粒子態アルミニウムと強い相関を持つことを示しました。さらに海水中の溶存態ジルコニウム、ハフニウム、ニオブ、タンタルの広範囲な鉛直断面分布を初めて明らかにし、Zr/Hf比、Nb/Ta比が水塊循環の新しい化学トレーサーとなることを示しました。

(3) 琵琶湖における地球化学的研究

湖水中のヒ素の化学種別分析法を開発し、琵琶湖においては溶存態ヒ素化学種が植物プランクトンの代謝により季節変化することを示されました。琵琶湖の局所的な開発および地球温暖化の結果、琵琶湖深層の富栄養化と低酸素化が進み、マンガンやヒ素の濃度変動が大きくなっていることを明らかにされました。

(4) 国際的研究基盤整備への貢献

国際的に広く使用される海水標準物質中の微量元素元素の分析に参加し、保証値や合意値の決定に大きく貢献しました。さらにモリブデン、亜鉛の安定同位体比参照物質の国際共同提案にも参加されています。国際GEOTRACES計画による海水中の微量元素元素データベース構築にも貢献されました。

これらの研究は海洋および湖沼の地球化学の発展に大きく貢献し、世界的にも非常に高く評価されています。一方、宗林会員は「海と湖の化学—微量元素で探る」、「生命の惑星」、「海洋地球化学」、「ハリス分析化学」などの教科書を執筆・翻訳し、地球化学の教育・啓発にも貢献されています。最新の研究を推進しながら、さらに教科書を数多く出版され、教育にも力を注がれている姿勢には頭の下がる思いです。宗林会員のおられる化学研究所は京都大学の宇治キャンパスにあります。必ずしも学部学生が気軽に訪問するところではないのですが、このようにたくさんの教科書を出版し、大学院生も数多く指導されてきました。博士号取得者は16名に及び、水圏地球化学分野の人材育成にも多大な貢献をされています。

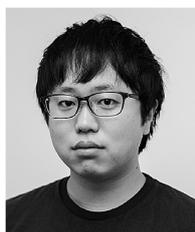
私個人としては、宗林さんが地球化学若手会の世話人を長年務められていたことを思い出します。この頃

の若手会は水圏関係の若手研究者、大学院生がとても活発に議論する場であり、当時の参加者が現在でも日本の地球化学の中心として活躍されています。私も大学院生時代には宗林さんに会場（静岡県）まで車で連れて行ってもらい、とても刺激的な議論に参加できたことを思い出します。一方、昔は宗林さんも白鳳丸の研究航海に参加されていましたが、最近ではお忙しいためご自身で乗船される機会はほとんどないように思います。しかし、宗林研究室の大学院生とは一緒に乗船することも多く、その活躍を身近に拝見して頼もしさを感じているところです。今回の宗林さんの日本地球化学会賞の受賞を心よりお祝いするとともに、今後、ますます研究・教育にご活躍いただくことを願っております。

（東京大学大気海洋研究所 小畑 元）

奨励賞：川崎教行会員（北海道大学大学院理学研究院 准教授）

受賞題目：難揮発性包有物の同位体分析を通じた太陽系最初期の物質進化の研究



川崎教行さんは、北海道大学理学部卒業後、北海道大学大学院理学院自然史科学専攻に進学し、塚本尚義教授指導のもと、2015年3月に博士（理学）を取得されました。博士論文のタイトルは「Isotopic signature of oxygen and magnesium for coarse-grained Ca-Al-rich inclusions from carbonaceous chondrites（炭素質コンドライトに含まれる粗粒難揮発性包有物の酸素・マグネシウム同位体宇宙化学）」です。その後、JAXA宇宙科学研究所のプロジェクト研究員を経て、2018年より古巣に戻られ、北海道大学大学院理学院地球惑星科学部門の助教として、太陽系形成直後の物質進化の解明をめざした研究を続けるとともに、学生さん達のよい兄貴分として、後進の指導をされてきました。本年（2022年）3月からは北海道大学大学院理学院地球惑星科学部門の准教授として、活躍されています。

川崎さんはこれまで太陽系最古の固体物質である難揮発性包有物（CAI）の局所精密同位体分析（酸素同位体変動、 ^{26}Al - ^{26}Mg 年代学）を進めてきました。川崎さんの研究の最大の特徴は、同位体顕微鏡システムを用いた精密同位体分析と、詳細な岩石学的・鉱物学

的記載が結び付けられることです。これによって、同位体および元素の空間分布が、鉱物組み合わせや岩石組織から読み出される形成プロセス（溶融・結晶化、凝縮）とともに議論することが可能となり、CAI形成場でガス中の酸素同位体が ^{16}O に富みリザーバと ^{16}O に乏しいリザーバ間で変動していたこと、それらのリザーバが太陽系初期の少なくとも5万年は共存していたことや、溶融CAIの冷却中の結晶化プロセスなどを明らかにすることに成功してきました。

同位体組成の空間情報を岩石学、鉱物学研究と融合させることは、同位体情報の正確な解釈を可能とし、初期太陽系の物質進化に対し、信頼性の高い制約を与えるために重要です。そのような研究アプローチができる研究者は世界的にも限られていますが、川崎さんは地球化学、岩石学、鉱物学にわたる豊富な知識と広い視野をもち、このようなアプローチでの研究が可能となっています。宇宙化学における若手の第一人者として、川崎さんの研究手法やこれまでの成果は高く評価されており、「はやぶさ2」が持ち帰った小惑星リュウグウサンプルの初期分析計画においても、化学分析チームがおこなう二次イオン質量分析計による試料分析の中心的役割を担っています。また、米国NASAの探査機OSIRIS-RExが2023年に持ち帰る予定の小惑星ベヌーのサンプルの同位体分析でもその貢献が期待されています。さらに、川崎さんの分析技術の高さは様々な分野から認められ、分化隕石、高压実験サンプル、火山岩、医学サンプルなどの同位体分析にも貢献しており、その成果が多くの共著論文として発表されています。私たちの研究チームの実験サンプルの分析でも大変お世話になっています。

このように川崎教行さんは、精密な局所同位体分析手法を、鉱物学、岩石学と融合させるという手法で、着実に初期太陽系の物質進化に制約を与えてきました。その研究アプローチは地球外物質科学の王道となるべきものであり、また、広く地球化学においても有効なものです。川崎さんの研究の今後の大きな発展を期待しています。

（東京大学大学院理学系研究科 橘 省吾）

奨励賞：藤崎 渉会員（筑波大学生命環境系助教）

受賞題目：「三畳紀末生物大量絶滅事件に関する地質学・地球化学的研究」



藤崎 渉会員は、2012年3月に東京工業大学理学部を卒業後、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻の博士前期、後期課程課程にて研究を行い、2017年3月に学位を取得しました。その後、2017年4月～2020年3月まで海洋研究開発機構の海底資源研究開発センターおよび海底資源センターで日本学術振興会特別研究員として研究を進展させ、2020年4月～2021年1月に東京工業大学大学院総合文化研究科で特任研究員を務め、2021年2月からは現職の筑波大学生命環境系助教として教育・研究に力を注いでいます。

藤崎さんは、これまでに顕生代に生じた生物大量絶滅事件や海洋無酸素事変に関する地質学的・地球化学的研究を進めてきました。特に、約2億年前に起きた三畳紀末生物大量絶滅事件における古環境解読に精力的に取り組み、顕著な業績を挙げています。

三畳紀末は、当時存在した超大陸パンゲア分裂に伴う大規模火成活動が起因となった表層環境変動が報告されています。ところが、これまでは局地的な情報を反映する浅海域の情報を用いて議論が進んでいたため、環境変動と絶滅との因果関係についてはよくわかっていませんでした。藤崎さんは、当時の遠洋深海域にて堆積した岩石である層状チャートが全球的な表層環境記録媒体として非常に有用であるという考えを基に、層状チャートが連続的かつ良好に保存されている愛知県犬山地域に着目しました。そして、同地域にて三畳紀末の古環境解読を進めるため、以下の研究を実施しました。(1) ドローンによる空撮写真に基づいた野外での地質図作成、及び絶滅境界を跨いだ完全連続層序の認定、(2) 認定層序においてチャート層だけではなく、堆積速度がより遅い頁岩層も含めての完全連続採取、そして(3) 採取した頁岩層を用い、同一岩石試料からモリブデンやウランといった酸化還元鋭敏元素群に加え窒素・炭素同位体比測定を行いました。化学分析の結果、(A) 酸化還元鋭敏元素の組成と窒素同位体比変動から、遠洋域は浅海域とは異なり、絶滅前後を通じて酸化的でありかつ海洋の硝酸が相対的に増加しており、また(B) 炭素循環摂動に関

しては絶滅時だけではなく、それ以前にも2回生じ、それら全てが大規模火成活動に起因することを初めて明らかにしました。これらの新しい結果に加え、化石記録及び炭素同位体比を用いて先行研究と本研究を統合することで、3回の大規模火成活動により徐々に表層環境は悪くなり、最後の火成活動時に最も環境が劣悪化した結果、絶滅が引き起こされたという新しい説を提唱しました。これまでほとんどわかっていなかった遠洋域の絶滅原因について、全球的な温暖化によって引き起こされた海洋循環の停滞に伴う酸素極小層の拡大が大きく関わっていることを示したことになります。このようにまるで見てきたような連続的なシナリオは、藤崎さんが地質調査から試料採取、記載、分析までの一連の手順をよく考えながら丁寧に進めたことによって描けたものです。まるで、チャート層の1枚1枚を剥がしながら観察して分析しているような感覚さえ覚えるような仕事ぶりに私は何度も感嘆させられました。

ここに記したように、藤崎さんはその研究が魅力的ですが、人間的にも魅力的です。ほんわかしていて、誰に対しても優しいので、JAMSTECでは事務スタッフ、技術スタッフに人気です。コロナ前に、スタッフで晩ご飯食べに行こうっていうときは、その場にはほぼ間違いなく藤崎さんがいます。スタッフからすると、弟分というか、息子みたいな感じなんじゃないですか。これは研究をするのに必須ではないですが、結果として同僚や先輩だけでなく、支援スタッフのみなさんも気持ちよく、藤崎君のことをサポートするわけで、それがあってこそ、研究は進んだのではないかと思います。そんな魅力的な藤崎さん、これからも周りからの十分なサポートや応援を受けながら、ますますいい研究をしていってください。楽しみにしています。

(海洋研究開発機構 鈴木勝彦)

● 2021年度日本地球化学会夜間集会・定時総会報告

2021年度日本地球化学会第68回年会（2021年9月6日-10日）会期中に開催された夜間集会と定時総会について報告いたします。なお、第68回年会については、野尻幸宏第68回年会実行委員長がすでにニュースNo. 247に報告済みですので、そちらをご覧ください。

夜間集会

夜間集会を9月7日18時から約2時間半にわたってオンライン開催いたしました。テーマは、「日本地球化学会の将来展望」とし、学会の将来のために現在取り組んでいる、あるいは取り組む必要がある変革に関する話題について会員と意見交換を行いました。本学会に限らず、学術団体を取り巻く昨今の環境変化は激しくなっています。特にコロナ禍にあって、教育・研究現場でもさまざまな変革が求められています。今回は3人の会員ならびに将来計画委員会から以下の話題提供がなされました。なお、本夜間集会への参加が難しい会員からの意見も集めるべく、Google Formを用いて、簡単なアンケートも実施しました。このアンケート結果の報告は別稿としたいと思います。

1. GJがオープンアクセス誌にリニューアル

—J-Stage オンラインプラットフォームを用いた学会が出版する英文誌へ—

(鈴木勝彦GJ編集委員長)

2. コロナ禍における意見交換

—教育、学習、研究現場の声：コロナで困ったことなどの意見交換—

(将来計画委員会)

3. 地球化学会におけるダイバーシティ

(益田晴恵副会長)

4. 総合討論：地球化学会の将来について

—学会は何を目指すべきか、学会という組織はどうあるべきか—

(南雅代副会長)

一つ目は、2022年1月から新装オープンするGeochemical Journal (GJ) 誌について、鈴木勝彦GJ編集委員長から紹介がなされました。GJ誌がJ-Stageを利用した完全オープンアクセス誌になること、APC (Article Processing Charge) がかかるようになること、APCの定価は15万円であるが、今後2-3年間はリニューアル特別割引を実施し、特に学生会員に対しては無料を検討すること、早期公開 (アクセプト後速やかに原稿を公開) が開始されること、GJ誌のレイアウトが一新されること、GJのウェブサイトが新しくなることなどについて詳細な説明がなされました。その場で、GJデザインのアンケートも実施しました。会員からさまざまな意見を聞き、どのような雑誌を目指すべきか活発な議論が行われました。

二つ目は、コロナ禍で教育・学習・研究推進において困ったこと、悩んでいることなどについて、現場か

らの声をいくつか取り上げて意見交換しました。学生が外部に研究仲間を増やせる機会やステップアップへ繋げる機会が減っていることなどが問題点として挙げられ、本学会ができることとして、ショートコース的な若手支援の充実や、動画による発信などといった提案がなされました。

三つ目は、ダイバーシティについて益田晴恵副会長から話題提供がなされました。まず、文科省が公表している女子学生の大学院学生の専門分野の分布、自然科学専攻の学生数、大学教員数などのデータに基づき、男女共同参画について意見交換を行いました。さらに、男女共同参画にとどまらず、地域、国際性、研究分野なども含めた広い視野で、ダイバーシティ問題についても意見交換しました。益田副会長からは学会役員、委員、年会コンビーナなどは、男女構成、年齢構成を反映させていることが望ましいとの提案がなされましたが、女性に負担がかかりすぎるのは良くないという意見も出されました。

四つ目は、総合討論として、会員状況、年会の開催形式、広報活動のあり方、地球惑星科学連合などとの連携、Goldschmidt国際会議との関わりなど、さまざまな観点から、学会は何を目指すべきか、学会という組織はどうあるべきかについて、アンケート結果も踏まえながら、会員と率直な意見交換を行いました。学会ウェブサイトへの会員専用ページの設置、年会における企業と学生の交流会の実施、学生による一般向けの動画の作成 (先生方が監修)、元素セッションなど、大変貴重な意見をたくさんいただきました。

今回も昨年に引き続きオンラインでの開催となり、会員が直接対面することは叶いませんでしたが、画面を介して活発な議論がなされ、チャット機能を使って意見・提案もたくさんいただきました。これらを参考にさせていただき、理事会、各委員会と協力しながら、より良い学会を目指していきたいと思います。夜間集会に参加いただいた方、アンケートに回答していただいた方、ありがとうございました。大変有益な意見交換ができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

定時総会

第68回年会は、準備段階では、9つの基盤セッションを9月6日-8日に完全オンラインで開催し、その後、9月9日-10日に特別セッションを弘前大学にて対面主体で開催する予定にしていました。定時総会・

受賞講演も、当初、特別セッションに合わせて、9月9日に弘前大学にて対面あるいはハイブリッドで開催する予定にしていました。しかし、8月に新型コロナウイルス感染症第5波のピークを迎え、特別セッションも、1セッション以外は完全オンラインに変更となったことを受けて、定時総会も、昨年と同様、Zoom Cloud Meetingsを利用して完全オンライン開催となりました。

本定時総会に先立ち郵送により集計した委任状の総数は263件であり、議決権のある会員数857名の1/10以上の参加が確認され、定款第17条に基づく決議要件が満たされました。

議長は次期年会実行委員長である石川剛志会員が務め、高橋嘉夫会員が議事録署名人を務めました。まず、鍵裕之会長の挨拶の後、逝去された会員の紹介があり、黙祷がなされました。その後、用意されていた議事が粛々と進められました。以上の定時総会の議事次第を以下に示しておきます。なお、総会資料は下記の学会ウェブサイト <http://www.geochem.jp/information/newsletter/2021soukai.pdf> からダウンロード

可能です。

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶：鍵 裕之 会長
4. 逝去会員（安藤 厚会員）への黙祷
5. 議事

[審議事項]

第一号議案：2020年度 事業報告

第二号議案：2020年度 決算報告と監査報告

第三号議案：2021-2022年度 役員を選出

[報告事項]

- ・2021年度 事業計画案
 - ・2021年度 予算案
 - ・倫理綱領について
 - ・GJ出版体制の変更について
6. 2022年会実行委員長挨拶
 7. 会場からの意見・提案など
 8. 閉会宣言

（日本地球化学会2019-2020年度副会長、
名古屋大学宇宙地球環境研究所 南 雅代）

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会、書評、研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上、電子メールでの原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2022年6月頃を予定しています。ニュース原稿は5月中旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会）

中川書子

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院環境学専攻地球環境科学専攻

Tel: 052-789-3464; Fax: 052-789-3436

E-mail: news-hp@geochem.jp

角野浩史

〒153-0041 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻

Tel: 03-5454-6741; Fax: 03-5454-6741

E-mail: news-hp@geochem.jp